

# 京鹿子

平成二十五年十月号  
第100号  
10月号

10月号

豊 田 都 峰

灌 響 集 その三十八

道祖神いのれば青野の風となる  
半日は常念岳とゐる風の青野  
鉾 嚙子聞き招きゐるうちはかな  
玄 武なる船周山や夏展く  
宮 址守る青葉木洩れの処得て  
遠 花火音なく消えてよりのこと





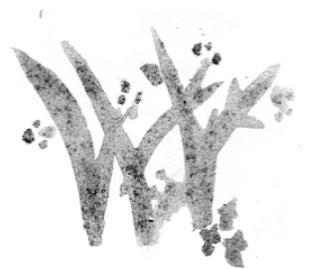
遠花火山黒々とのこりけり  
手花火に背なよりくらき深さあり  
ゆきのした咲かせ大原麓住み  
ゆきのした瀬音に挟まるたつきぶり  
晩夏光ななめに流れ野の木立  
立杭の二三砂丘なる晩夏  
沖を指すなりの流木影晩夏  
沖にまで雲なく晩夏光たいら



# 馬 追

丸山佳子

銀 漢 や 悲 願 を い だ く 女 の 身  
星 と っ で 天 の 裁 き の き び し さ よ  
わ が 肩 を た し か に 蝗 足 蹴 に す  
馬 追 に 女 鍋 釜 ひ か ら せ る  
帰 り き て 厨 の 蟲 が 鳴 き す が る



## 秀華採集

父の日や父百笑のクレヨン画

井尻 妙子

壁面いっぱい飾られている父の日の「百笑」はたいへん焦点的に把握された描写となっている。感慨をいう必要はない。具体的なものを描けば俳句は十分である。

海風の晶子の町や濃あぢさゐ

高田 風信子

青田中耐震工事の公民館

貝路 紅沙

海鳴りを聞いて育った晶子、そして明るくまとめられている点を評価したい。後句の社会性を踏まえながら、「青田」という一番豊かさをさえ感じさせるものの中で把握した点を評価する。



— 近 詠 —

鈴鹿 仁

二百十日

山暮れの二百十日の啼き鴉  
空缶の転がる先はけふ厄日  
字護る地蔵の笑みに鳥渡る  
富士の名のよき山いくつ鳥渡る  
秋扇はなしのつまの探るかに



— 近 詠 —

和田 照海

底抜け日和

浮巢まで十尋といへる死角かな  
鳩の巢にみづかげるふの立ち渡る  
田見回りひとつに浮巢加へけり  
巢の鳩の耳利き目ききして抱卵  
鳩の子に底抜け日和なる一湖

神麓集



道祖神 北村香朗

炎天に数多く建つ道祖神  
石あれば炎暑の中に道祖神  
高々と伸びゆく高さ桐の花  
おもいきり蹴り甲斐のある梅雨茸  
はびこつて小判草などいらざるよ

冷奴 藤岡紫水

運不運言わぬ仲間と冷奴  
伝え聞く子別れ峠草いきれ  
句友逝くや夕顔の花白き夕  
風鈴を吊りてほどよき風を待つ  
白玉をつるりと喉へ二枚舌

菊日和 竹貫示虹

菊花展いづれおとらぬ江戸と肥後  
妻植糸し菊に昔が見えてくる  
銀杏黄葉天の明るさ地に撒いて  
どこへ頭を出しても孤りかいぶつり  
雲間より日矢降臨す大刈田

松田都青

昼寝児を背負ひ微積分解いてゐる  
朝刊のやうに配られ来る薫風  
身の上を語る言葉の梅雨湿り  
雑談の裏は退屈梅雨に入る  
ヒーローになりたいばかりのサングラス

今朝の秋 丹生をだまき

蝉声のもう始まつてゐる薄明り  
草引きも人に頼みて熱に臥す  
短か夜をオリンピツクが眠らせず  
雷が転げまはつて雨ざんざ  
今朝の秋起きぬけに飲む水一杯

晩夏 柴田朱美

からだから何か失せゆく晩夏かな  
晩夏光人には見せぬ心の髣髴  
齒科の椅子晩夏の景を傾ける  
生き方をやわらかくして晩夏かな  
横になること多き日々晩夏昏れ

# 神麓集



齒の浮きし話の後の鱧の寿司  
鵜の嘴が波の尖りへ突き刺さる  
狛犬の如き爺婆土用の暮れ  
高ければ名山夏の雪を溜め  
時の日を無駄なく使ひ湯の二人

鱧

丸井巴水

白日傘

塩貝朱千

夢風車舞ふ日舞はぬ日蓮揺る  
夫渡る木橋へ妻の白日傘  
吹き抜ける湖風せきれい一羽翔つ  
大蓮咲かせをとこの瞳のやさし  
木下闇地藏泣きがほ笑ひがほ





# 京鹿子集

## 豊田都峰選

父の日や父百笑のクレヨン画

京都 井尻 妙子

青りんご少し歪に私生活

青田風どこでも停まるメロデーバス  
青田中耐震工事の公民館

なで肩の亀が顔出す梅雨晴間

引越しを手伝ふ子等の玉の汗

アリソナ 伊吹 之博

水無月や音なく灯る母の部屋

夏行事ポスター仕上ぐ娘夜を明かす

鉄砲町といふ名残りぬ立葵

東大阪 高田風信子

高下駄の父予捌きし鱧の膳  
異国にて友の作りし水無月食む

街薄暑チンチン電車の音曲がる

純白の大きな紫陽花夜の庭

オハイオ 水谷 直子

技衆集ふさかい七まち夏つばめ

夕虹の七彩の橋天に浮き

海風の晶子の町や濃あぢさゐ

螢の火仄かに弧描き目の前を

てんとむし親指姫は花の中

久世 貝路 紅沙

ドームの背割りて飛び立つ天道虫

西空に光る金星京遙か

影濃ゆく越し来し街の夏めきて  
札幌 野村 鞆枝

木々の葉のささやきあうて夏来たる

北国の気性は荒し蝦夷梅雨

アカシアの香につつまれし通学路

蛇の衣を財布に収め富を願ふ

無沙汰を詫び五七五暑の見舞

電線に子つばめの群れ巢を閉づる

買物の今日はゆるりと夏至なりし

妻は旅物干台の夏の月

梅雨晴間秩父連峰鮮やかに

眠る児の手に人形や青簾

水溜り避ける子浸る子梅雨晴間

入道雲かの竜巻を生みたるか

少年の部活まみれに明け易し

そこはかとなく揺らしみる水中花

荒梅雨に日本列島耐へひたる

青葙や土台まだある祖母の家

梅雨の川葛飾岸の灯を殖やし

棕櫚の花二代目のなき門の鍵

猫の額の庭に猫来る梅雨晴れ間

死ぬことの不自由沖を泳ぐかな  
高ければ百合の誰より人恋へり

渋川 東 秋茄子

さいたま 神田 惣介

千葉 河内 桜人

伊藤 希眸

直江 裕子

水無月水のまはりの水さはぐ

いつのまに悔ひほどの恙著我の雨

まつさきに猫が来てゐる夏木立

あかつきの湖に翔ぶものみな涼し

一音のごと鳥すぎて夏薊

合歓の花影あるものはみなしづか

汗臭きシヤツ少年は拗ねてゐる

横顔が殊に父似よ夏帽子

白玉の窪みホツホ泣き笑ひ

梅雨蝶や呪文のやうに息を吐く

ほうたる来い梢のひろがる夕の風

一会かなはぐれ虫に就いてゆく

梅雨晴れや近々と颯つ利島かな

腹這ひにカメラ構へぬ文字摺草

浅漬の水茄子さくつと檀尻男

駒指せば眼裏に父夕端居

紫陽花に夕暮れせまる離れ島

夕端居祖母の夕星さそひけり

なんじやもんじやの花着て昼の静ころ

柿若葉はげしき雨に立ち向かふ

二人して夫なき後を合歓の花  
青大将庭を無尽に子ら散れり

佐々木紗知

高野 春子

布川 孝子

浦安 安田 一郎

松戸 岡山 敦子